3　婦負における古墳出現期の土器の変遷

井田川・山田川合流域に広がる婦負平野一帯は、古墳出現期における地域的様相と社会の変遷を考える上で極めて重要な位置を占める地域である。この地域では、ここ数年の集落・墳墓の調査成果から、その豊かな地域性や他地域との交流関係が明らかとなってきたばかりでなく、古墳時代への社会の転換が早い段階に行われた、政治的にも進んだ地域であったことが判明してきている。しかし、このような古墳出現期の動態をより明確なものにするには、土器の分析による裏付けが不可欠である。そこでここでは、婦負における土器の様相と時間的推移を、先学の研究成果を基礎として概観したい。なお、今回基準資料とした遺跡は、千坊山遺跡群に含まれる10箇所の遺跡（鍛冶町遺跡、千坊山遺跡、南部Ⅰ遺跡、富崎赤坂・離山砦遺跡、富崎墳墓群、鏡坂墳墓群、六治古塚、向野塚、富崎千里古墳群、勅使塚古墳）に、富山市の杉谷A遺跡、杉谷古墳群、八尾町の翠尾Ⅰ遺跡を加えた13遺跡である。

(1)　各時期の概要

変遷図（第39図～第44図）の作成に際しては、上記の遺跡の遺構一括資料ないしそれに近いものを用い、主に口縁部・脚部の形態から分類して配列した。紙幅と作成時間の都合上、かなり大雑把な分類となってしまった部分がある。また現段階では全ての時期にまとまった量の良好な資料が存在する訳ではなく、不安定要素も多い。資料の増加を待って、今後改めて訂正・補足を行っていきたい。また今回出来なかった調整手法や容量などによる分析も今後の課題とするところである。

Ⅰ期（法仏Ⅱ式期）

当期は、先行する法仏Ⅰ式の形式を受け継いだ在地系土器で構成される。祭式土器は、大型品が多く、スタンプ文（S字状文、鋸歯文、同心円文）や浮文、赤彩による装飾など、加飾性に富む。

甕形土器（以下、「形土器」省略）は、胴部が長胴もしくは卵形であり、底部は平底となる。有段口縁甕のA・B類は短い口縁部に長い頸部をもつものが殆どで、付加状口縁となるA（B）2類も多い。A類の擬凹線の条数は少ない。受け口状口縁のB（A）6類の出土例は稀少である。くの字口縁甕のC類では、端部を面取りするC1類が多い。壺では長頸壺が多く、長頸有段となるもののうち口縁部が内湾するB2類は口縁部が外側に大きく広がる。D2類は外来系の影響が窺えるものであるが、在地化している。台付装飾壺のH類は、胴部が下半部で屈曲しそろばん玉状になるものであり、大きさは様々である。長頸のH1類、有段口縁のH2類があり、32は有段口縁壺と棒状脚が結合した大型品で稀少品である。高杯は大型品が多く、杯底部が直線的になるA類と椀形を呈するB類がある。A類は口縁部が長く伸び、口縁端部は内面に凸線を作り出すものや肥厚させるもの、短く外に屈曲させるものなどが見られる。B類は杯底部と口縁部の境が強く屈曲する。高杯の脚部は棒状有段となるものが多い。器台は、大型品が多く、発達した

時期区分		型式・様式	婦　負	南加賀・漆町 田嶋(1986)	畿内大和 寺沢(1986)
弥生時代	後期後半	法　仏	Ⅰ	2　群 (＋)	Ⅵ－3
	終　末	月　影　Ⅰ	Ⅱ－1 Ⅱ－2	3　群	庄内0
		月　影　Ⅱ	Ⅱ－3 Ⅱ－4	4　群	庄内1
古墳時代	前期前半	白　江	Ⅲ	5　群 6　群	庄内2 庄内3
		古府クルビ	Ⅳ	7　群 8　群 9　群	布留0
		高　畠	Ⅴ		布留1

表2　変遷案と関連編年の対応の目安

受部に対して脚柱部は細い。有段口縁のA類と、受部底から外反して伸び口縁端部を強く面取りもしくは付加状口縁とするC類がある。A類は脚部も有段となる。蓋は通気孔のあくA類と頂部が窪むC類がある。鉢には有段口縁のA類の大型品がある。

Ⅱ期（月影式期）

当期は、前期に引き続き土器組成は基本的に在来の形式で構成するが、Ⅰ期の加飾性は衰退する。以下、Ⅱ期を４段階（Ⅱ―１・２期は月影Ⅰ式期、Ⅱ―３・４期は月影Ⅱ式期）に分けて記述する。

甕は、胴部が卵形となり尖り気味の底部をもつ。有段口縁のA・B類は、Ⅱ―１・２期には頸部が引き続きやや長めではあるが、口縁部が伸長し始め付加状口縁は無くなる。また、段の屈曲が強くなり、直立もしくは外傾するものが多くなる。A類では擬凹線の条数が増える。B５類では口縁部断面が三角形になるものが一定量含まれる。Ⅱ―３・４期には、頸部は短くなり口縁部を外傾・外反させるようになる。また、段の屈曲が緩やかになり、口縁下端外面を肥厚させる程度のA（B）４類、A（B）５類が出現する。外来系の影響が推定されるものにⅡ―１・２期の近江・東海系の受け口状口縁のB６類があるが、出土例は稀少である。くの字口縁のC類は、Ⅰ期と変わらず端部を面取りするC１類が多い。壺は時期が下るにつれ長頸壺が減少し、短頸有段壺のC類の割合が増えて様々な形態のものが出現する。D２類は外来系の影響が窺えるものであるが、在地化している。くの字口縁のE類の出土量は少ない。台付装飾壺のH類は小型化し、時期が下るにつれ胴部が丸くなり、定型化してくる。高杯と器台は、時代が下るにつれ小型化する。高杯のA類は、Ⅱ―２・３期で底部が一旦小さくなる。Ⅱ―４期には底部は再度大きくなって、口縁部がやや短くなり立ち気味になる。Ⅰ期からの口縁端部内面を肥厚させるものはⅡ―３期まで見られる。B類は、Ⅱ―１期で底部が一旦大きくなり、Ⅱ―２・３期では再度小さくなり、Ⅱ―４期には口縁部がやや短くなり立ち気味となる。椀形を呈するE類は、量は少ないがⅡ期を通して存在する。高杯の脚部は、Ⅱ―１・２期は棒状有段となるものと裾部途中で強く屈曲して直線的に開くものが一定量を占めたが、時期が下るにつれ裾部途中から緩やかに外反するものとなる。器台は、有段口縁のA類は口縁部外面が無文化し、Ⅱ―３期には底部が内湾気味になる深い杯部のものが出現する。A類の脚部は、段の無いものが殆どとなる。C類は殆ど無くなり、Ⅱ―３期には小型のB類、D１類が出現する。蓋は、Ⅱ―１・２期はⅠ期からのA類とC類が継続するが、Ⅱ―３・４期には摘み頂部が平坦なB類と小型で内面に垂下する返しが付くD類に入れ替わる。

Ⅲ期（白江式期）

当期には、祭式土器を中心として外来系（特に東海系）の影響を受けた土器（東海系のパレススタイル壺・小型器台・高杯、畿内系の二重口縁壺・直口壺、山陰系の甕・壺）が波及する。ただし、それらには在地化したものも多く、全体的には依然として在地性が強い。

甕は、胴部が卵形もしくは球胴状となり肩部の張りは弱くなる。底部は尖る。有段口縁甕のA・B類は、口縁部の外傾・外反が強くなり、A（B）４類、A（B）５類の割合が高くなる。B４には胴部外面を叩き調整する畿内系の影響を受けた甕（222）も僅かに存在する。また、山陰系の影響が推測されるものとして口縁下端を外側に突出させるB７があるが、出土例は稀少である。くの字口縁甕のC類は、口縁端部を丸く仕上げるC２類が増加し、口縁部が外反して伸びるものが多くなる。壺では、長頸壺が更に減少し、長頸広口壺のA１類は消滅する。残ったものも頸部が短かめになるなどの退化が進み、頸部が内傾するB４類も見られる。短頸有段壺のC類は依然として様々な形態のものがあるが、全体に口縁部の外傾・外反が強くなる。外来系の影響が窺えるものでは、畿内系の二重口縁壺の影響が推測されるD１類、東海系パレススタイル壺の影響が推定されるD２類、山陰系の影響が推測されるD３類、畿内系の直口壺であるJ類が出現するが、在地化したものも多い。くの字口縁のE類は増加する。台付装飾壺のH類は、前期の定型化した小型装飾壺が退化・消滅する。高杯は更に小型化が進み、A類、B類共に口縁部が更に短かめに立つよ

うになる。その他、口縁部が長く直立気味に伸びる、器高の深いC類が出現する。外来系と在地系の折衷型であるF類では、C類の杯部と東海系の脚部が結合したF１類がある。外来系の影響が窺えるものでは、東海（もしくは畿内）系のG類が出現する。高杯の脚部は、前期からの裾部途中から緩やかに外反するものが継続する他、裾部で外反するもの、東海系のものなどがある。器台は、有段口縁のA類が激減し、小型の器台に転換する。特に、小型器台もしくはその影響を受けたと考えられるD２類が出現し、増加する。蓋は、前期からのB類、D類が継続する。

Ⅳ期（古府クルビ式期）

当期には、外来系土器は畿内系が強くなる。ただし布留系甕は受容しない。在地系土器は、祭式土器を中心にやや衰退傾向にあるものの、依然としてその比率は高い。

甕は、有段口縁甕のA・B類が衰退し、特に有文のA類は殆ど無くなる。無文のB類は段を僅かに残こす程度のものが存在する他、北近江系の長浜甕と考えられるB８類（271）が僅かに見られる。くの字口縁のC類は、口縁端部を丸く仕上げるC２類が多くを占め、口縁部が外反して伸びるものの他、外傾する口縁部の端部が若干内湾気味となり球胴状となる畿内系の影響が推測されるもの（276）が僅かに見られる。壺は、長頸壺が消滅し、短頸有段壺のC類の口縁部は更に外反が強くなる。外来系の影響が窺えるものでは、畿内系の二重口縁壺の影響が推定されるD１類、山陰系の影響が推定される大型のD３類、畿内系の直口壺のJ類がある。台付装飾壺のH類は、Ⅱ期で定型化したものとは形態が異なる小型品（285、286）が僅かに見られる。高杯は前期から継続するC類、B１類があり、器高が深くなる傾向がある。外来系の影響が窺えるものでは、東海・畿内系のG類の他、畿内系のH類が出現する。器台は、小型器台のD２類が多い。装飾器台のE類では、脚部が小型器台脚部に類似し、装飾性が退化したもの（298）が１点のみ見られる。蓋は、前期からのB類、D類が継続し、B類は摘みが高さのある逆台形となるものが多くなる。

Ⅴ期（高畠式期）

当期の資料として確認しているのは南部Ⅰ遺跡SI01出土土器のみである。当期には、土器の形態が斉一化される。前期に引き続き、外来系土器は畿内系を中心として見られるが、布留系甕は受容しない。

甕は、有段口縁甕がほぼ消滅し、くの字口縁甕で占められるようになる。C２類は胴部が倒卵形もしくは球状となり、丸底で、強く屈曲して外反する口縁部が付く。この形態に布留系甕の影響が若干窺えるか。壺では、強く外反する短頸有段壺C類と、畿内系の直口壺であるJ類が見られる。また、小型坩型土器のI類が出現する。高杯は前期から継続する畿内系のH類と、在地系の杯部と畿内系の脚部が結合したF２類が見られる。

(2) 数量分析

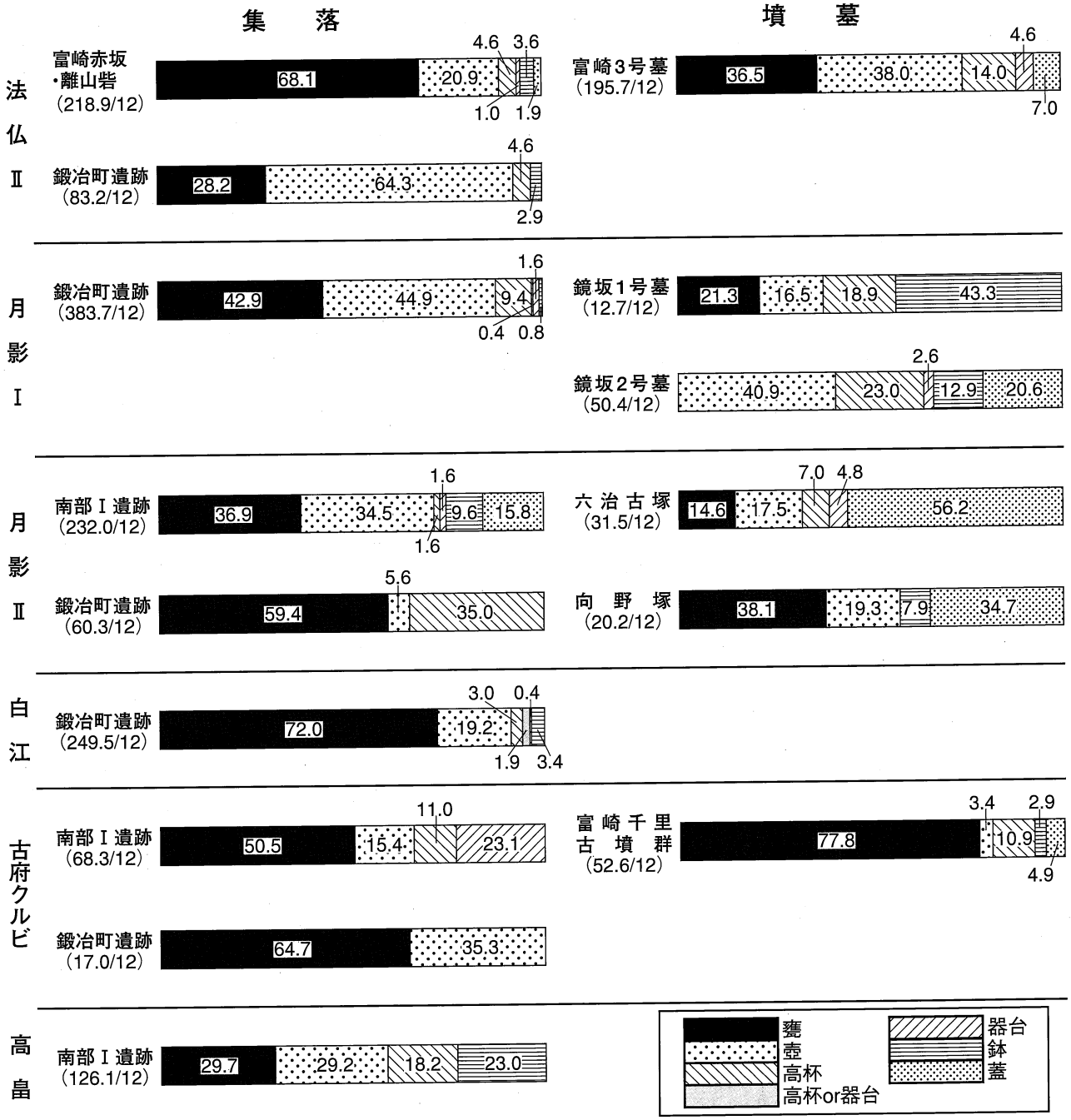
ここでは、婦負における遺跡別の器種構成比率と甕の口縁部形態類別構成比率を時期別に算出し、推移を追った。対象とした遺跡は、集落では鍛冶町遺跡、南部Ⅰ遺跡、富崎赤坂・離山砦遺跡、墳丘墓・古墳では富崎墳墓群、鏡坂墳墓群、六治古塚、向野塚、富崎千里古墳群である。土器の出土量は、口縁部計測法によって算出した（宇野1992）。ただし、個体識別法を併用していない為、実際の出土量が数値に反映されていない面があることを断っておきたい。

① 遺跡別器種構成比率（第37図）

これについては、先学によって、越中では法仏式期から古府クルビ式期にかけて甕が時期を下るにつれ漸移的に増加し、それと相反して壺が減少する傾向があることが指摘されていた（稲石1997）。今回の分析は、データ量の不足や遺跡・遺構の性格差などによってやや不安定な面はあるものの、ほぼ同様の傾向が得られた。集落では遺跡の性格上当然甕が多いが、法仏Ⅱ式期には壺の比率が甕を上回る遺跡が存在し、その後は徐々に壺が比率を減らして月影Ⅱ式期で壺と甕がほぼ同量となる。法仏Ⅱ式期から月影Ⅱ式期に至るまでは、北陸東部の他遺跡と比べると、壺の比率がやや高い印象がある。次の白江式期では壺の比率が激減し、反対に甕が激増する。高畠式期には再度、甕と壺が同量となり、高杯と鉢の比率が急増する。上記の変化に当てはまらない特異な構成比率となるものについては、データ

に使用した土器数が少ないことが第一の原因として挙げられるが、なかには遺跡や遺構の性格に起因すると推測されるものもある。例えば法仏Ⅱ式期（月影Ⅰ式期も含む）の高地性集落である富崎赤坂・離山砦遺跡は甕が主体となる構成であり、また、月影Ⅱ式期の鍛冶町遺跡はSI908出土土器のデータを使用しているが、壺が極端に少なく高杯が非常に多い特徴がある。古府クルビ式期の南部Ⅰ遺跡は溝祭祀が推測されるSD02出土土器のデータを使用しているが、高杯と器台が34.1%と高い比率を占めている。

一方、墳墓では、高杯を始めとした祭式土器の占める比率が高い。富崎３号墓以外は出土量が少ない為不安定なデータではあるが、壺と甕の比率については集落とほぼ同様の変化を遂げるようである。ただ、古府クルビ式期の富崎千里古墳群については、特に土器出土量が少なく傾向が捉えにくい。グラフでは甕が多用されるようにも見えるが、実際は口縁部が残存しない壺も一定量存在し、器台も存在する。同時期の首長墓である勅使塚古墳では壺・高杯を多用しており、首長墓クラスの古墳との階層差を含めて、今後改めて検討を深めていく必要がある。



第37図　遺跡別器種構成比率

※出土量の算出は口縁部計測法による（宇野1988,1992）

② 甕口縁部形態類別構成比率（第38図）

北陸東部における甕の口縁部形態の時間的な変化については、先学の研究成果により、法仏式期は有段口縁甕とくの字口縁甕がほぼ同じ比率で、月影Ⅰ式期には有段口縁甕がかなり優位に立つようになり、月影Ⅱ式期には有段口縁甕が優位に立ちながらも徐々にその比率を減らし始め、古府クルビ式期にはくの字口縁甕による北陸東部特有の組成が形成されることが指摘されてきた（小田木1989）。一方、婦負地域では、概ねこれと同様の変遷を辿るものの、法仏Ⅱ式期には既に有段口縁甕が68％と完全に優位に立っている。更に月影Ⅰ式期になると有段口縁甕は90.5％を占め、月影Ⅱ式期にはほぼ全てとなり、白江式期では比率は減るものの依然として60.7％を占めている。この比率が逆転するのは古府クルビ式期になってからであり、この時期にはくの字口縁甕が66％に急増する。有段口縁甕が殆ど無くなるのは高畠式期まで下る。これらのことから北陸東部でも婦負は、有段口縁甕が長期に渡って優位に立ち、くの字口縁甕への転換時期が遅いという地域性があることが推察される。有段口縁甕における有文口縁の比率については、法仏Ⅱ式期は18.4％と低いが、月影Ⅰ式期には29.3％と増加し、有段口縁甕が最も多くなる月影Ⅱ式期にピークを迎え、34.2％を占める。白江式期になると19.3％に減少し、古府クルビ式期には1.8％と殆ど無くなり、高畠式期には完全に消滅する。

(3) まとめ

以上が、婦負における古墳出現期の土器の変遷である。墳墓に見られる特徴も含めて考えると、婦負は北陸東部でも特に強い地域性をもち、他地域の文化を取り入れながらもその豊かな地域性を長く保持し続けた地域であったといえる。最後に、集落と墳墓の動向を含めた婦負の変遷の概略を記述し、まとめに変える。

弥生時代後期後半（法仏Ⅱ式期）

出現期。高地性集落を含む集落が２箇所に出現する。周溝墓的な四隅掘り残しタイプの四隅突出型墳丘墓が１基築造され、これ以降、同形態の墓を特定個人墓として築く墓制が成立する。この墳丘墓の受容形態は、他地域の墓制を固有のものに消化してから伝統的墓制の素地の上に取り入れたものと考えられ、婦負独特の地域性や他地域との交流の在り方を示している。先行する在来の形式を受け継いだ土器の様相もこれと合致するものである。

弥生時代終末期（月影Ⅰ・Ⅱ式期）

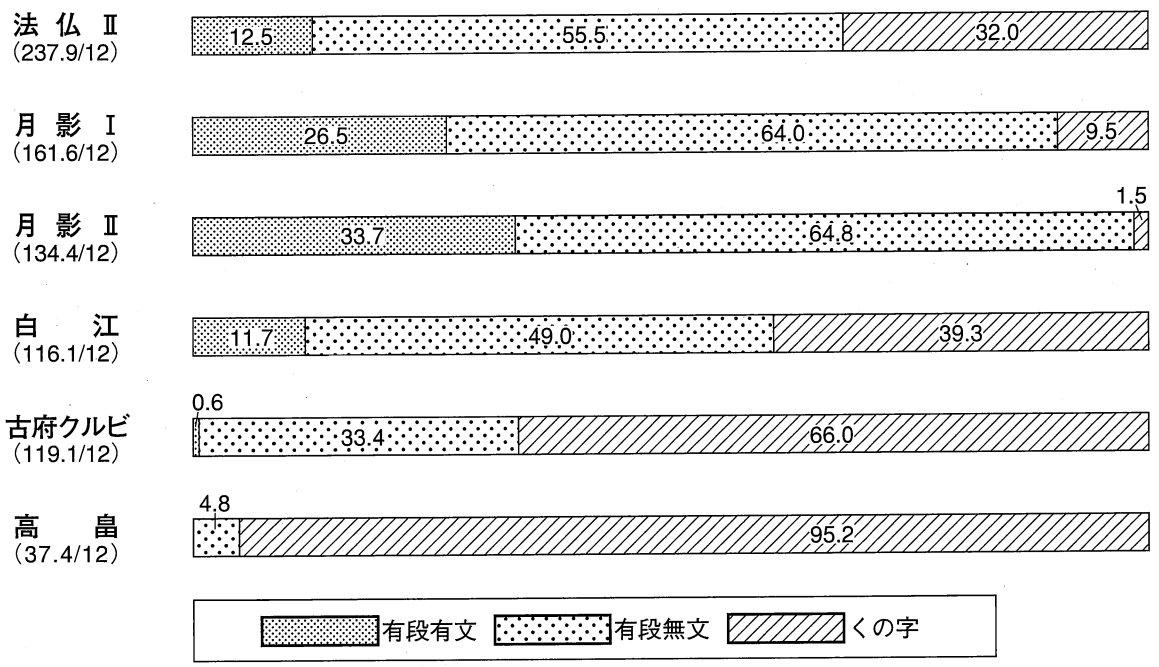
成立・発展期。集落は少なくとも６箇所に存在し、相互に等質的な農業共同体が成立する。四隅突出型墳丘墓は、前期からの四隅掘り残しタイプ１基と突出部が極端に肥大化した「千坊山型」ともいえる形態のもの４基が築造され、婦負で共通した墓制がとられる。また、月影Ⅱ式期には県内最古の前方後方形墳丘墓が築造される。土器は前期に引き続き、強い在地性をもつものである。なお、四隅突出型墳丘墓は次の白江式期に１基が造られて以後、消滅する。

古墳時代初頭（白江式期、古府クルビ式期）

流動・再編期（最盛期）。大きな地域社会の変動が起こり、急速に地域の統合が進んで集落が再編される。広域な範囲を取り込んだ重層的な階層性が生じ、それに応じて墳丘の形態や規模が複雑に序列化する。その中で、首長墓として卓越した規模の前方後方墳を県内で初めて導入しており、逸早く大和を頂点とした汎日本的政治秩序に参入していったことが推測される。しかしその反面、古墳には葺き石や埴輪を受容しないなどの地域性がある。土器についても、祭式土器を中心に外来系土器を受容し、古墳時代的土器様相への変化が始まる反面、依然として在地系土器も多く残り（祭式土器においても白江式期には多くは在地系で、古府クルビ式期になっても並存する）、地域性が維持される。古墳や土器に見られる選択的な受容形態から、一定の独自性、自立性を持った在地勢力の存在が想定できよう。

古墳時代前期前半（高畠式期）

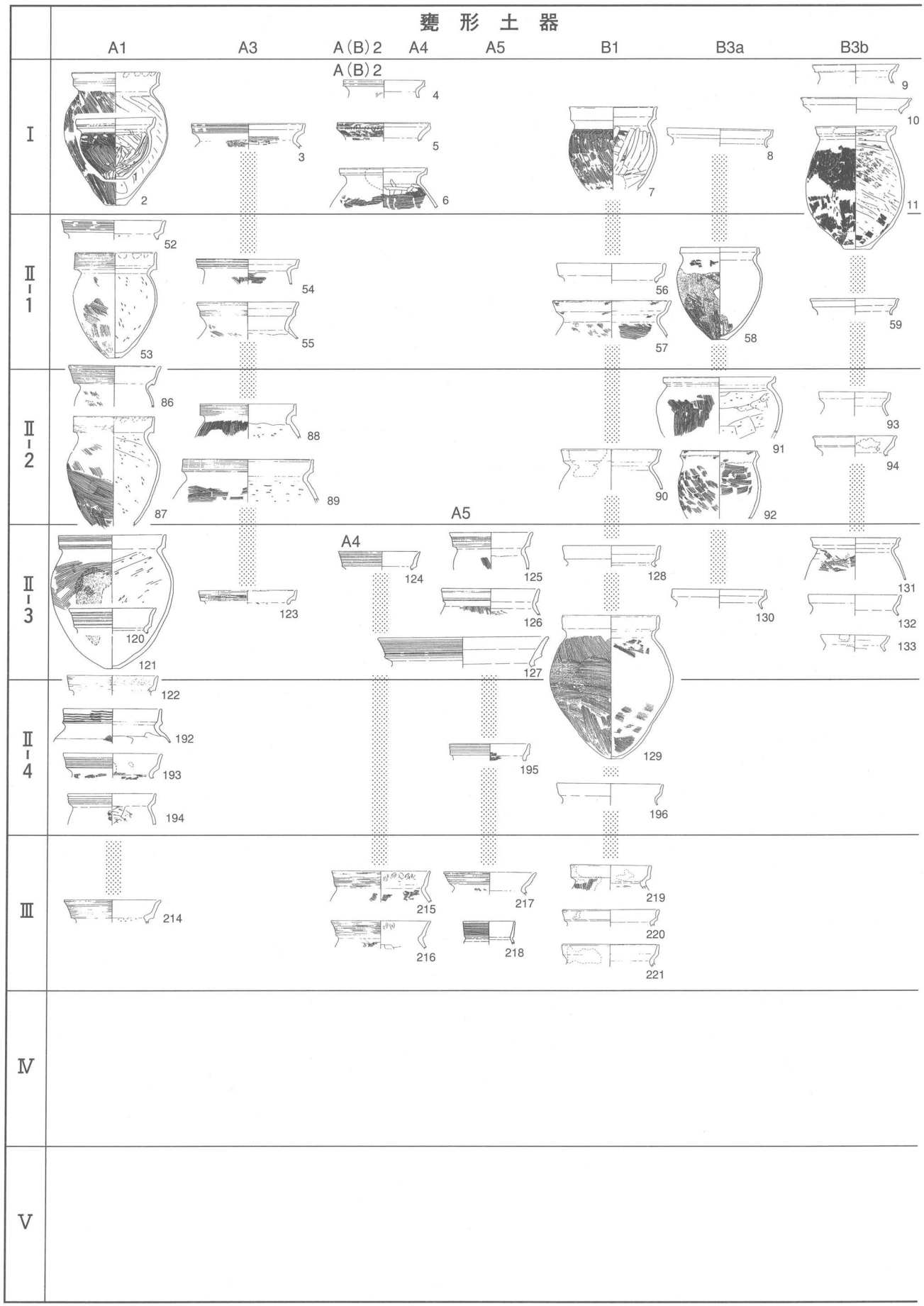
衰退期。集落が激減し、古墳の有無も不明である。土器は斉一化され、畿内の影響を強く受ける（特に祭式土器は全て畿内系となる）。ただし、依然として布留系甕は普及しない。在地勢力が衰退し、地域性が希薄化する。（大野）



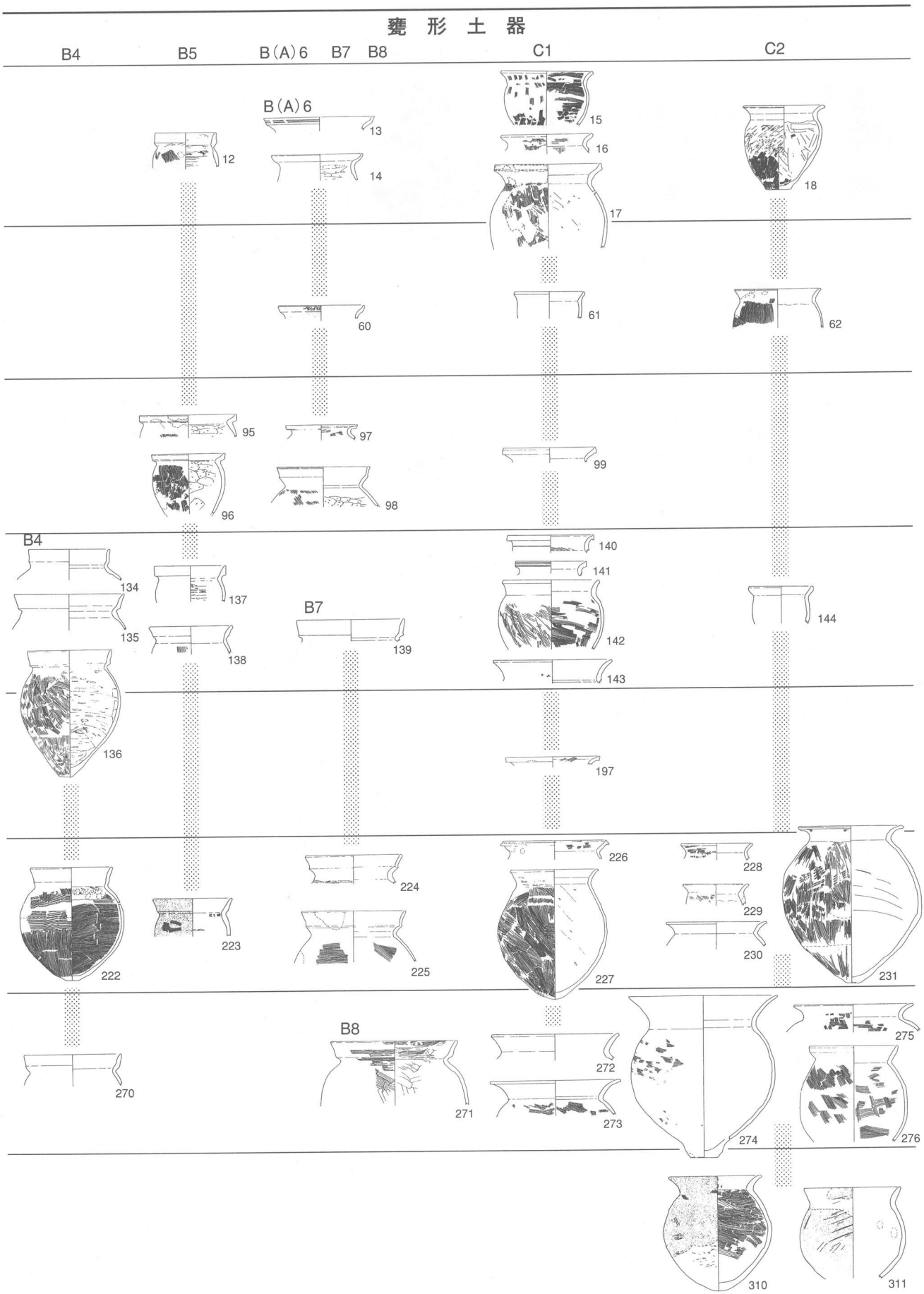
第38図　甕口縁部形態類別構成比率　　※出土量の算出は口縁部計測法による（宇野1988,1992）

時期	基　準　資　料
Ⅰ	鍛冶町遺跡A区SK130（6,25）、鍛冶町遺跡A区SD145（15）、鍛冶町遺跡A区包含層（45）、鍛冶町遺跡C区SK816（9,22,23,35,38,39,46）、鍛冶町遺跡C区下層包含層（2,31）、鍛冶町遺跡C区排水溝（42）、離山砦遺跡（13,20,21,48）、富崎赤坂遺跡（7,11,16,18,37,49,51）、富崎3号墓（1,3,4,5,8,10,12,14,17,19,24,26,27,28,29,30,32,33,34,36,40,41,44,50,43,47）
Ⅱ—1	鍛冶町遺跡A区SK60（54,67,71,78,84）、鍛冶町遺跡A区SK108（55,57,62,63,64,66,69,68,73,74,79,81）、鍛冶町遺跡A区包含層（80）、鍛冶町遺跡C区下層包含層（53）、鏡坂1号墓（52,56,72,75,77,82）、南部Ⅰ遺跡SK08〔H11〕（58,59,61,65,70,83,85）、南部Ⅰ遺跡試掘CT12（76）、南部Ⅰ遺跡試掘CT27（60）
Ⅱ—2	鍛冶町遺跡A区SI15（86,88,89,91,93,94,95,96,98,100,101,103,107,114,115,119）、鍛冶町遺跡A区SK120（87,90,92,97,99,104,109,110,112,113）、鏡坂2号墓（102,105,106,108,111,116,117,118）
Ⅱ—3	千坊山遺跡SI04・11（150,156,157,158,164,168,174,175）、南部Ⅰ遺跡SI01〔H8〕（120,124,125,126,128,130,131,132,134,135,137,138,139,140,141,142,143,144,145,149,151,152,153,154,155,159,166,171,172,173,178,179,183,184,186,187,188,189,190）、南部Ⅰ遺跡試掘BT64（121,127,146,148,165,169,182,185）、六治古塚（123,133,160,161,162,163,176,177,180,181）
Ⅱ—4	鍛冶町遺跡B区SI908（122,129,136,147,167,170,191）、翠尾Ⅰ遺跡（199,202,203,209）、向野塚（193,194,195,196,197,212）、杉谷A遺跡（192,198,200,201,204,205,206,207,208,210,211,213）
Ⅲ	鍛冶町遺跡B区SI745（214,217,219,221,222,224,226,228,229,231,233,238,239,244,255,256,261,265,266,268,269）、鍛冶町遺跡B区SI746（220,262）、鍛冶町遺跡C区上層包含層（232,242,258,259,260,263）、鍛冶町遺跡D区SD275（241）、鍛冶町遺跡D区SD277（215,216,225,227,234,236,237,240,249）、鍛冶町遺跡E区包含層（245）、南部Ⅰ遺跡試掘AT12（254）、南部Ⅰ遺跡試掘AT19（253）、南部Ⅰ遺跡試掘BT26（246）、南部Ⅰ遺跡試掘CT6（223,230,248,250,257,264,267）、翠尾Ⅰ遺跡（243,247,251）、杉谷4号墳（218,235,252）
Ⅳ	鍛冶町遺跡A区SK48（276）、南部Ⅰ遺跡SD02〔H8〕（270,272,273,274,275,279,281,283,287,296,298,299,300,305,308,309）、南部Ⅰ遺跡試掘BT29（294,303）、富崎千里4号墳（288,297）、富崎千里6号墳（292,307）、富崎千里9号墳（285,286,282,293,304）、富崎千里10号墳（284）、富崎千里16号墳（278,302）、富崎千里17号墳（271）、勅使塚古墳（277,280,289,290,291,295,306）
Ⅴ	南部Ⅰ遺跡SI01〔H11〕（310,311,312,313,315,316,317,318,319,320,321,322,323）、南部Ⅰ遺跡BT89（314）

表3　変遷図基準資料

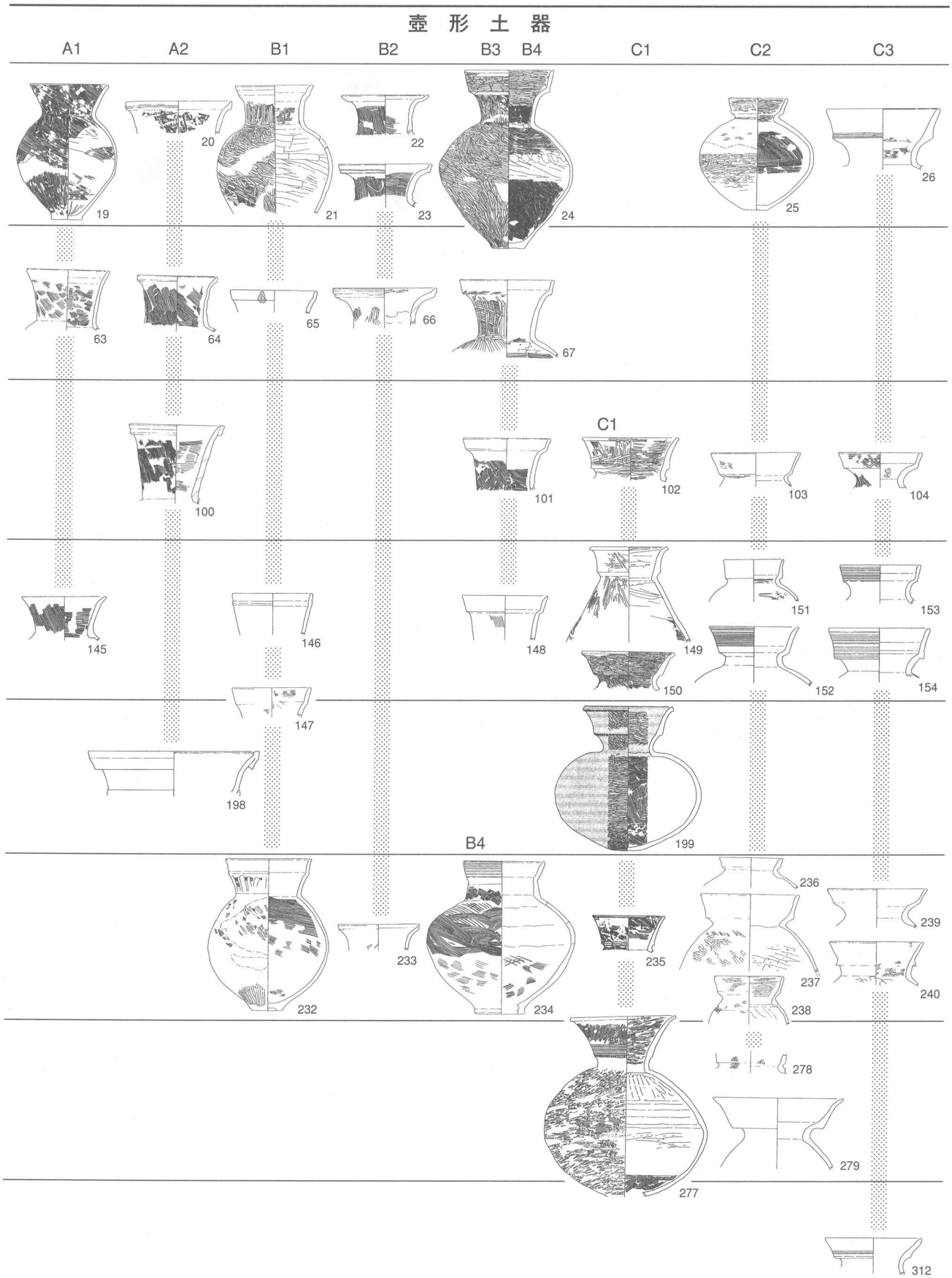


第39図　婦負における古墳出現期の土器変遷案(1)　S=1/10

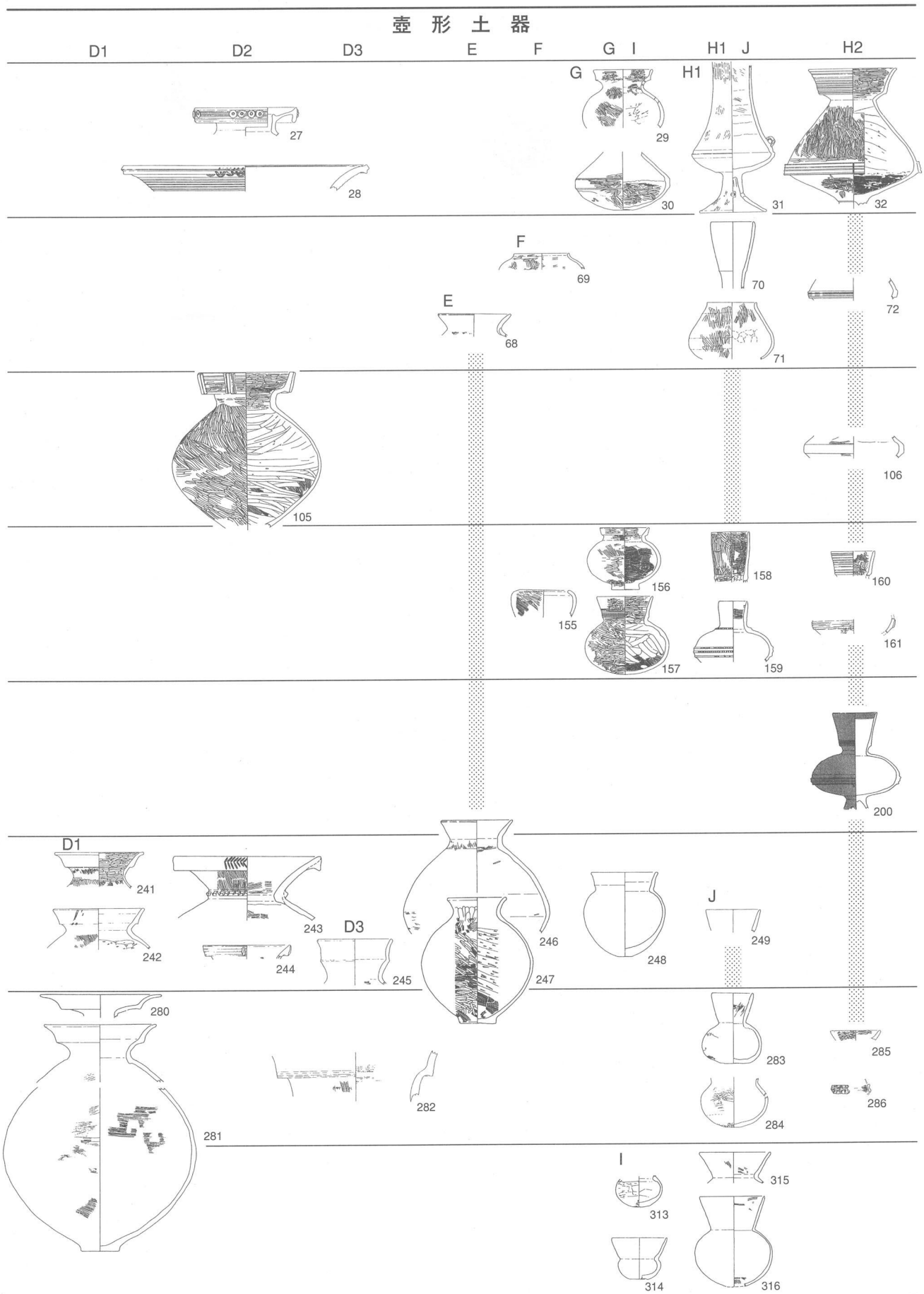


第40図　婦負における古墳出現期の土器変遷案(2)

S=1/10

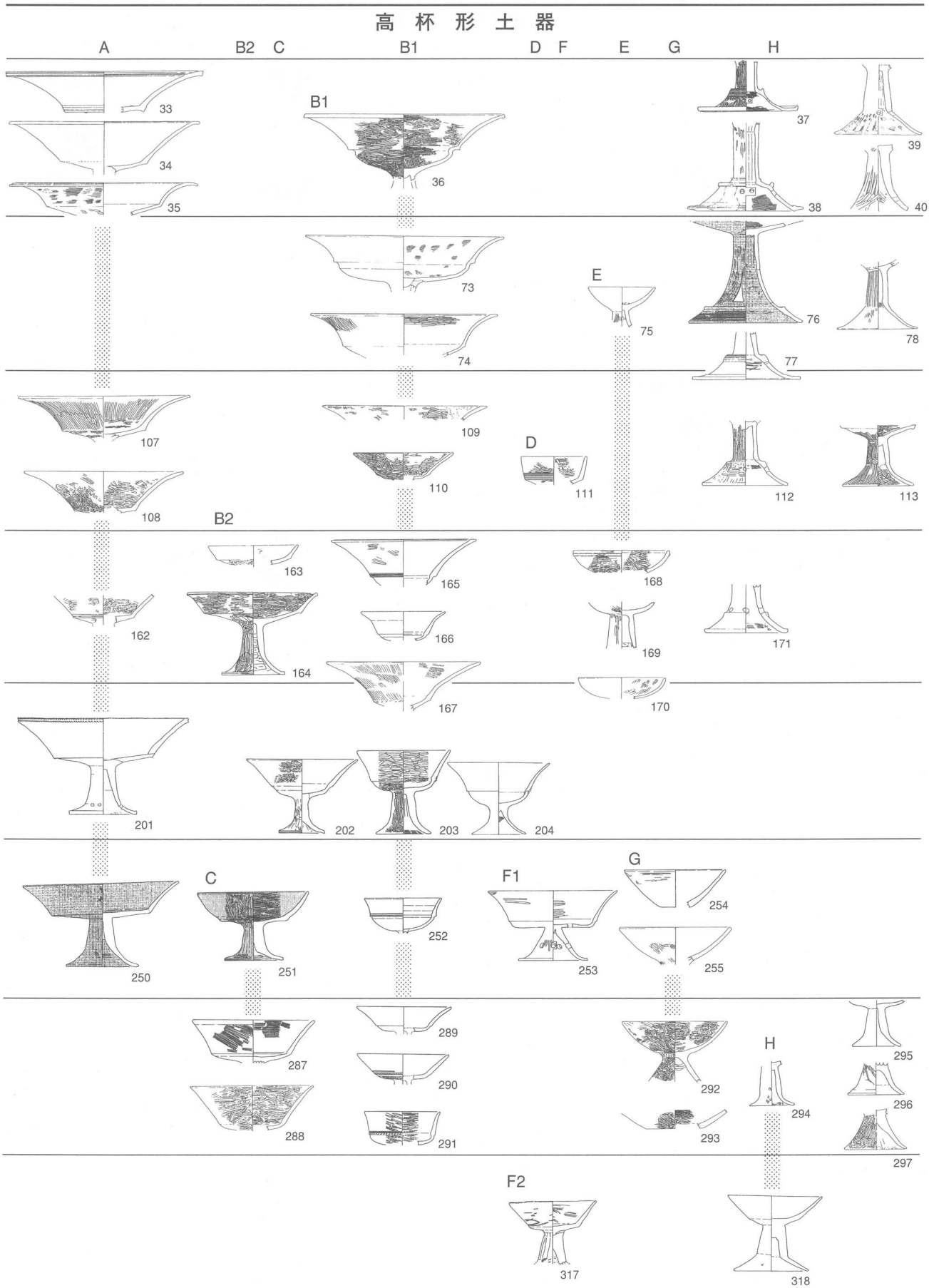


第41図　婦負における古墳出現期の土器変遷案(3)　S=1/10

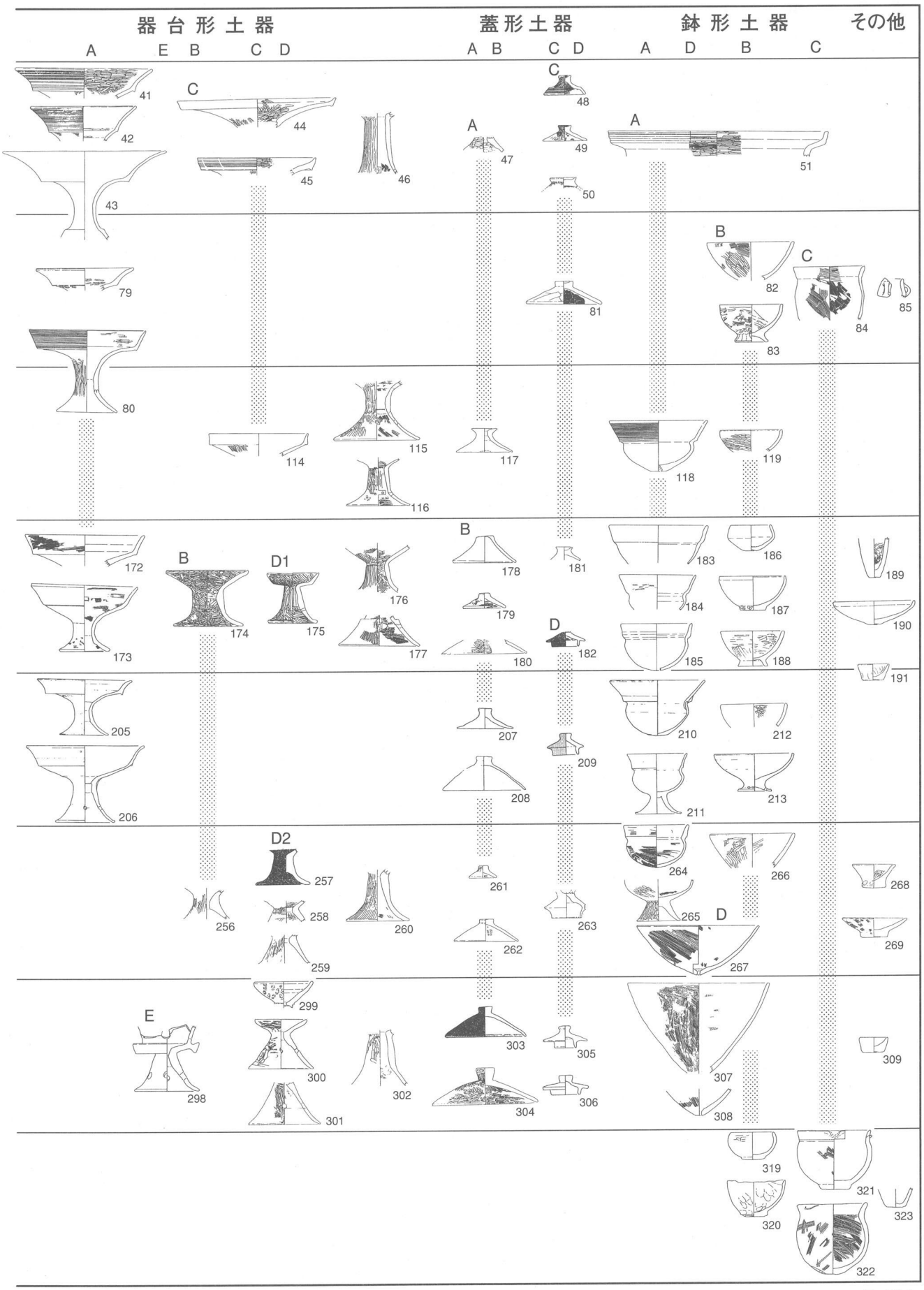


第42図　婦負における古墳出現期の土器変遷案(4)

S=1/10



第43図　婦負における古墳出現期の土器変遷案(5)　S=1/10



第44図　婦負における古墳出現期の土器変遷案(6)

S=1/10

参　考　文　献

あ　石川県立埋蔵文化財センター1986『漆町遺跡Ⅰ』

石川考古学研究会シンポジウム実行委員会1986『シンポジウム「月影式土器」について　報告編』

内田亜紀子1997「越中における古代土師器の編年予察」『埋蔵文化財調査概要―平成８年度―』財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所

内田亜紀子2000「越中婦負郡の古代土師器煮炊具―婦中町中名Ⅰ・Ⅴ・Ⅵ遺跡の竪穴住居出土資料を中心に―」『富山考古学研究』第３号

内田亜紀子2002「富山県の黒色土器―６～８世紀の県内資料を中心にして―」『富山考古学研究』第５号

宇野隆夫1992「食器計量の意義と方法」『国立歴史民俗博物館研究報告』第40集　国立歴史民俗博物館

越中瀬戸焼発祥四百年記念顕彰会実行委員会1988『越中瀬戸―発祥四百年記念誌―』

岡本淳一郎他1999「佐野台地における古墳出現期の土器について」『富山考古学研究』第２号

小沢国夜史2003「富崎城を中心とした城のうつり変わりにみる婦中町の戦国時代」婦中町教育委員会生涯学習フェスティバル文化財ミニ講座レジメ

小田木治太郎1989「北陸東部における古墳時代開始期の土器様相」『北陸の考古学Ⅱ　石川考古学研究会々誌』第32号　石川考古学研究会

か　上市町教育委員会1984『北陸自動車道遺跡調査報告―上市町土器・石器編―』

上市町教育委員会1984『北陸自動車道遺跡調査報告―上市町木製品・総括編―』

金沢市教育委員会1995『石川県金沢市上荒屋遺跡Ⅰ』

金沢市・金沢市教育委員会1996『西念・南新保遺跡Ⅳ』

金沢市埋蔵文化財センター1999『戸水遺跡群Ⅰ戸水ホコダ遺跡』

河合忍、稲石純子1997「Ⅳ考察―翠尾Ⅰ遺跡出土の弥生土器について―」『翠尾Ⅰ遺跡発掘調査報告書１』八尾町教育委員会

木田清1998「法仏式土器の認識と再確認」『石川考古学研究会々誌』第41号　石川考古学研究会

小杉町教育員会1999『HS―04遺跡発掘調査報告』

さ　財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所1994『梅原胡摩堂遺跡発掘調査報告（遺構編）』

財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所1994『梅原胡摩堂遺跡発掘調査報告（遺物編）』

財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所1998『五社遺跡発掘調査報告』

財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所1999『富山県指定史跡勅使塚古墳発掘調査レポート』

財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所2002『清水島Ⅱ遺跡・中名Ⅱ遺跡・持田Ⅰ遺跡発掘調査報告』

財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所2002『石名田木舟遺跡発掘調査報告』

酒井重洋　1997「中世土師器の分類について―清水島Ⅱ遺跡・中名Ⅱ遺跡・持田Ⅰ遺跡から―」『埋蔵文化財調査概要―平成８年度―』財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所

た　富山考古学会1999『富山考古学会創立50周年記念シンポジウム　富山平野の出現期古墳《発表要旨・資料集》』

富山市教育委員会1974『富山市杉谷地内埋蔵文化財予備調査報告書』

富山市教育委員会1975『富山市杉谷（A・G・H）遺跡発掘調査報告』

富山県教育委員会1986『富山県小杉町・大門町小杉流通業務団地内遺跡群　第８次緊急調査概要　―小杉丸山遺跡―』

富山県埋蔵文化財センター・大門町教育委員会1992『大門町企業団地内遺跡発掘調査報告（２）―布目沢北遺跡第３次調査―』

富山大学人文学部考古学研究室1990『越中王塚・勅使塚古墳測量調査報告―北陸の前方後円・後方墳の一考察』

は　婦中町1967『婦中町史』
婦中町1997『婦中町史』
婦中町教育委員会1995『千坊山遺跡（１）』
婦中町教育委員会1996『千坊山遺跡（２）』
婦中町教育委員会1998『千坊山遺跡（３）』
婦中町教育委員会1998『富山県婦中町南部Ⅰ遺跡発掘調査報告』
婦中町教育委員会2000『富山県婦中町南部Ⅰ遺跡発掘調査報告Ⅱ』
婦中町教育委員会2000『富山県婦中町県営担い手育成基盤整備事業に係る埋蔵文化財試掘調査報告書―婦中南部地区・千里地区』
婦中町教育委員会2002『富山県婦中町千坊山遺跡群試掘調査報告書』
北陸中世土器研究会1997『中近世の北陸―考古学が語る社会史』
ま　町田尚美2002「富山県出土の中世後期瓦質土器」『富山考古学研究』第５号
宮田進一1988「越中瀬戸の窯資料（１）」『大境』第12号富山考古学会
や　谷内尾晋司1983「北加賀における古墳出現期の土器について」『北陸の考古学　石川考古学研究会々誌　第26号』
八尾町教育委員会1997『翠尾Ⅰ遺跡発掘調査報告書１』
雄山閣1996『日本土器事典』
吉岡康暢1989『珠洲の名陶』珠洲市立珠洲焼資料館
吉岡康暢1991『日本海域の土器・陶磁［古代編］』六興出版